
IS『に』転生ってふざけんな！

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS『に』転生つてふざけんな！

【Nコード】

N4278Z

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく嘶である。

第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・？

第1話

気付くと、俺は真っ暗な空間にただ1人いた。

（なんだ．．．ここは．．．？夢の世界ってヤツか？）

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。　　ってちよつと待て！

（なんだよ処刑場って！　ていうかあんた誰だ！？　あれ？声が出ない．．．）

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

（ああ、なんだそういう事か．．．って納得できるか！！）

「五月蠅いですよ」

神様（自称）は冷たい声でそう言った。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によって減っていきます」

（あ、ひょっとしてそっちの手違いでまだ死なない俺を殺しちゃったからどっかの世界に転生させてくれるとか．．．って俺死ん

だの!?)

「そうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違いなんてしません。なんせ全知全能ですからミスなんてあるはず無いのです」

(おおつふ・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね?」

(・・・・・・・・)

「さらにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかったり、アンティールルで決闘デュエルしたりしましたね」

(・・・・・・・・はい・・・・・・・・)

「さらにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをして続けていましたね」

(ちょっと待ってくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積みりに積もった小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぽっくり逝く事になってしまいましたね(笑)」

(笑)じゃねえ!!何が悲しくて17で死ななきゃならなかったんだよチクショウ!)

「あ、一応言っておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬことになってました」

(なお酷いわ!! ……って、おい。それはどういう事だ?)

「あなたは非常識なほど悪運が強かったので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になったのです」

(……俺って、何度も死神に迎えに來られてたんだ……)

「つたく、役立たずが……。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真つ黒になった気が……。つーかこれ、棚ボタなんじゃないか?)

「あなたが思っているほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(ならISの世界で!ちゃんとIS動かせるようにしてくれよ!)

「誰が貴様のようなゴミ虫の言う事なんか聞くか」

(……あれ?なんかキャラ変わってない?)

「ごたごた五月蠅い! ISですね! それでは逝ってらっしゃい」

(字違う!! ……あれ……。なんだか意識が遠のいていく)

（……あれ？　ここはどこだ？）
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

（あ、まさか俺、ここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、ここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺）

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISスーツだろう。

（……ってちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろうか！！）
その時、俺は気付いた。『俺、さつきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は……3巻末と6巻の初めに出てきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・まさかとは思うが・・・俺、ちゃんと人間に転生してますよね、神様ア！！

「これからよろしくね、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』」

やっぱりかああああい！！！！

第1話（後書き）

ウザい主人公ですいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかったのも、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの？」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願いします。

第2話（前書き）

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆーワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させてい
ただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば
界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公君の生前犯した罪について、まだ書いてな
かった細かいところも説明してさしあげましょう」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていた
リモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやってるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子
を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の
弁当を持って来ていた始末だ」

「そりゃすごい」

神「あとは・・・昼休みに決闘デュエルしていた」

「私もやってますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らな
い大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのじ
や2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されなくなかつた
ら財布を置いてさっさと消えな』と言い放つたり」

「それはひどい・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・あまり長くするのもなんだ。これ

くらいにしておう」「

「そだね。では本編とつぞ」

第2話

（これ、終ったんじゃない？）

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うとか口もきけない。なにこのプレイ。誰得？

「これからよろしくね、『銀の福音』」
シルバリオ・ゴスベル
俺得でしたw。

（キタだろコレ！）

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの？」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずっと考えてて6巻で再登場した時にテンション上がった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとすっげー美人。

まあとどのつまり、何が言いたいのかというと・・・今、彼女はISスーツを身につけている。という事は、今からISに乗ったりするわけだ。

そのISが何かって？決まっているだろうこの俺、『銀の福音』だ！
シルバリオ・ゴスベル

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくつつくわけで・・・
・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。ついでに血も通ってないわ。

（いや、そんなブルツクみたいなネタを一人でやってんじゃねえよ！）

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」
研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・つか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかってるぞ、俺。やっぱISになったから頭の方も良くなってるのかもしれない。

「（気のせいかしら・・・・。いつもとISの反応が違うような気が・・・・・・・・）」

初期化と最適化が終って気付いたのだが……ISの装甲には、俺の感覚というものが通っていなかった……。

どういう事かというと、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するという事に対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触っていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実とは違った。

ISの装甲部分に感覚が無いという事は、触っている感触もクソも無いのだ。ただ意識だけがISの中にある　今の俺はそういう状態なのだ。

（期待した俺が……馬鹿だった）
心底俺はそう思った。

「ファイルス、調子はどう？」
オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん・・・なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような・・・」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「ファースト・シフトまだ一次移行もできてないし・・・チーフ、一度コアをリセットするべきではないでしょうか」

（・・・は！？　ちよつと待ってくれ！　もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ！？　このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか！？　あ、冥土の土産に丁度いいかも・・・ってそうじゃない！　せつかくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ！　臨海学校編でよオ！）

ISには、意識と似たような物がある・・・そう言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりがねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ！

（がんばれ俺！　やればできる！　どう頑張ればいいのかわかんねエけど！）

とりあえず一次移行が終了するようにと俺をこんなのにした誰かさんに祈りを捧げると・・・

『 初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解った。

「っえ！ さっきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに・・・！？」

そんなバカな。あれからけっこう時間経ってたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊れてるんじゃないか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう」

ナターシャさんは研究員に向かってそう言った。

（ん？テストって・・・？）

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの楕円形のスペースが姿を現した。

（これは・・・ISのバトルフィールドか・・・？）

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているその中に、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今ので解ったが・・・どうやら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在って無いようなモノ、か・・・。なんだか悲しいな。

（まあでも、間近でISの戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるってか）

俺はISはアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。

その理由は、アニメで観たISの戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが……。

キャラも可愛かったから好きだが……やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんなにいい話はそう落ちてないねきつと。

……はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうありますが。まだ二次移行してないから機械っぽい多方向推進装置ですけど。
マルチスラスター

とかなんとか考えてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴァイブか が現れた。

（まさか、いきなり実践っていうヤツじゃ……ないわけないか）

思えば一夏もそうだった。いきなり代表候補生のセシリアとタイマンで闘うという無謀な挑戦だった。

だが俺は一夏の二歩三步先に行く！ なんて言っただって、こっちは専門的知識すら単語1つも理解してないどころか見てすらいらないんだからな！

（とか何とか言っても、ただ見てるだけなんですけどね）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思っていた時だった。

リヴァイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わって来た。これは撃たれるな。

だがこっちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに
違い

バカアアアンツ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエー！？　なんだコレ！？　感覚ないクセに痛覚だけあんの
かよー！！）

俺は脚部に感じた痛みに戸惑いながら、なぜナターシャさんが避け
なかったのかを即座に考えていた。これもISになったお陰なのか
？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が……『俺の動く意志に比例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなったたり伝わりにくくなったりする』というのが真っ先に浮かんだ。

（ちょっと待ってくれ！ 俺は戦闘訓練なんて全くやって無い、ズブの素人なんですけど！？）

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパーセンサーで全方位が視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な動きを見せてるんですけど……。

（まさか、コアのリセットか福音^{オレ}の廃棄処分についての判断じゃないだろうな……！！！？）

第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは・・・」

「そういえば、彼がなにかあなたに祈ってましたけど、何かしたんですか？」

神「特に何も。やろうと思えば何でもできるけど」

「・・・それにしても、このままだとホントに次で連載終了すんじゃない？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯だって何度も死にかけてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃないか」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がらないだろ」

神「そういう発言は控えるよ」

続く

第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思ったらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思ったら、実はマウスの電源がオフになってただけだった」

神「残念なヤツだな」

「まあ雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わったら面白いんだけど」

第3話

（考える！　なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！！）

このまま死ぬのはまっぴらご免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行ってくれ・・・じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！！

（やってやる！　やるしかないんだ！！）

「（どついつ事なの・・・！？　福音が私の動きに全くついてこない！！）」

私は、今までとのISとは全く違う福音に戸惑っていた。

そもそも、この『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルは国際条約違反の軍用IS。前まで操縦していた量産型や競技用のISとは少し勝手が違うとは思っていたけど……ここまで違うものなのとは思っていなかった。

ハイパーセンサーによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、あの人達にも想定外の事なのね。

「（ここは一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね……）」

私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時微かに、声のようなものが耳に入った。

いえ、そうじゃない。耳で聞いたんじゃない、もっとこう……『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか……でも、他に考えられない）」

ISには意識と似たようなものがあり、IS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど……これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさっきの声のような……福音（この子）の叫びは、きくと闘いたいと言っていたわ。正確には解らないけど。

「一緒に、飛びましょう

銀の福音！」
シルバリオ・ゴスペル

（………？）

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて………なにか、こう心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいなのが。テレパシ－なんてしたこともされたこともないから、わかんねエけど。

（とにかく、今はあのリヴァイブをどうにかしなきゃな）

確か福音は広範囲攻撃ができたな。下手な鉄砲でも、全方位に攻撃できるなら1発は当たるかもしれない。

（名前なんだったけ……そうだ、たしか《銀の鐘》シルバー・ベル）

ピピピッ！

《銀の鐘》シルバー・ベル起動

攻撃を開始します

翼のような多方向推進翼に搭載された砲門36全てが開かれたのが解った。

(モーションは・・・少し屈んで、一回転だったっけ)

俺がアニメで見た記憶を呼び起こし、イメージを作る。背景はもちろん夕焼け空だ。アレはカッコ良かったなあ。

すると、俺の身体・・・つまり福音は遂に動き出し、360度全方位に羽のようなエネルギー弾をバラ撒いた。

[illegible]

バトルフィールドの壁とかはエネルギーバリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴァイブは銀の鐘をモロに食らったらしく、大ダメージを受けていた。

（いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘル！！）

アニメではラスボス的扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが……ここまでとは思わなかったぞ、軍用IS。

なんかさっき、近接戦に持ち込むと感じたんだが……俺、素人だつて言っただじゃん！ でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなおされて撃たれるだろうなあ……。痛かつたんだよね、撃たれたりすると。

『銀の鐘』と表示されたアイコンが、私の前に突如現れた。

「（この子が……私の気持ちに答えてくれたの？）」

すぐに私はアイコンをタッチして、銀の鐘を起動させた。

すると、今から私が動くべきイメージが頭の中に流れ込んできた。

その動きを忠実に再現し、頭から生えた翼のような多方向推進翼の砲門からエネルギー弾を放つ。

[illegible]

圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。
そしてもちろん、その的となった相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能は、^{スペック}攻撃力だけでなく機動力も高かったハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（ここは近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきね！）」

ギュンーーーーッ!!

「うそっ!？」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかった。

私はただ『一気に近付こう』と思っただけなのに……この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さでこの子は動いた。

「（本当、どこまでも変わった子ね）」

うおおおお。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに……。その急加速が半端ねエ！危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、二度とこんな肝を冷やすような事はしたくないね。

（そういや、俺って福音つふくがどれだけの性能を持っているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらっても解るとは思えないけど）

え？　なんでだらだらそんなに喋っていられるのかって？

それは、もう戦闘テストが終っちゃったからなんだよな……。。

接近中に近接武器がないかと探してただけど・・・福音^{オレ}、武器が翼しかなかったんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力って素晴らしい。

そういえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴァイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビツクリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事が・・・。

まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はもうお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るってことだ。

あの神様だけが、な。

第3話（後書き）

神「終わらなかったね」

「当たり前ですよ。3話で終了ってちよつとした記録ですよソレ」

神「ucci。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？この先」

神「そりゃあ神だし」

「ですよー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いつてホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かったんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが……やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考えてあるの？」

「あと2、3話分は。それから先は……どうしようか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

第4話（前書き）

神「なにか言いたい事があるんじゃないのか？」

「この小説書くのがなんだか楽しくなってきたんだけど」

神「あ、そ。でもほどほどにしておけよ？蓮舫の時みたいにクレーム来たら一瞬で消えちまうんだから」

「ですよー。日本の表現の自由はいろいろ制限が付きましますから」
神「それは制限ではなく、プライバシーや名誉に関わる事に関しての当たり前の苦情だな」

「でも蓮舫のはいいだろ別だと思う」

神「アレは相手がイメージばかりを追求する国会議員だからああなつたんだ。実際ジブリは113話見て大爆笑してたつて言うし、面白ければ大概の事は流せられる。ただし今回は相手が悪かつただけ。冗談が通じない国会議員相手では結果は目に見えている」

「あれ？なんだか神様キャラ変わってない？」

注） 今回の神様の説明には、一部フィクションが含まれている可能性があります。第3者の情報に惑わされるのではなく、自分でしっかりと調べてから意見を出し合いましょう。1人1人のネットマナーが、多くの人を救えたらいいのにねw

「誰だよコレ……。まあいいや、本編どうぞ」

第4話

転生してから何時間経ったことやら……。

俺は今、ナターシャさんと一緒に（ここ重要！ テストに出るよ！）風呂に入っている。

「なんて羨ましいんだ！ 俺と代われッ！」「チェーンジッッッ！
！！」とお叫びになられている方も大勢いらっしやと思います。

え？ 前話までと口調が違っって？

ちょっとした賢者になっている今の私には、今の喋り方の方がしっくりくるのですよハッハッハ。

でもですね、羨ましいというのは浅はかってモンですよ。

（だって、見えないどころか聞こえすらしないんだもの……）

せめて、音だけでも拾ってほしかったッ！ できれば感覚もあってほしかったッ！！

だが現実には悲しいかな。カメラがオフになっているので視界はゼロ。全くの黒。さらに耳が無いから音聞こえないの、テヘッ。

そんななどこの高僧が喜ぶのかわからねえくらいの禁欲世界なのだよ、ここは……。

（お願いだ、3分間でいい。誰かこの俺を解放してくれ！！！）

誰も解放してくれませんでしたw 神後でおぼえてる！

（つか・・・待機状態ってマジで何もする事ねえな・・・。せめてナターシャさんと会話でもできたらなあ）

などと考えながら、俺は何もせず、無為に時間を浪費していた。え？ 一人称が戻ってる？

賢者モードから解放されたんだよ。

で、風呂から出た後俺は眠かったから寝させてもらった。

この状態でも寝るという感覚はある。さらに眠気も感じる。不便で仕方が無いと思えるだろうが、これは実際ありがたい。

人間って生物は、寝てないとストレスがたまる。そのストレスの発散先を自分で用意できない今の俺には、眠るという事ができるのは嬉しい限りだ。存分に寝かせてもらおう。

目が覚めると、そこはよく分からん場所だった。

「……教会……?」

目の前には見上げるほど大きなパイプオルガンが壁のようにそびえ立ち、横に長いイスが規則的にいくつも並んでいる。

その光景は、まさしく万人が思い描く『教会』だった。キリスト式の。

ってか、俺今喋らなかったか!?

「あ……あー。本日は晴天なり。じゅげむじゅげむごころのすりきれビッグバンアタック!我が生涯にいつんの悔いな……よっしゃああ!……!」

やっと・・・やっと言葉が話せた！！ おまけに身体もある！ なんだか知らんけど甲冑着けてるけど。外せないけど。

「う・・・うーん？」

俺が浮かれ上がっているすぐ近くで、どこかで聞いたことのある声が聞こえた。

（ま、まさか・・・）

「・・・え？ こっちは、ど・・・・・・？」

ナターシャさん来たアアアアアアア！！！！！！

（マジか！？ マジなのかコレ！！ 俺の深層意識が創り出した仮

想空間（夢）じゃないよね！！ 現実だよね！！？）

コレが現実なら・・・今、俺はナターシャさんと2人ツきり！
おまけにここ教会だし！もう死んでもイイ！ あ、もう1回死んで
たんだっけ。でも2回死んでもイイよ、グリーンだよ俺！！

「
ッ！」

刹那、俺の視界は反転し、背中と後頭部を強打する。やっぱり痛み
はあるな。あと抑えつけられているのは甲冑のせいで無いけど、身体
が動かないからきつと抑えつけられているってわかる。

（つーか、さっき何があった！？）

俺が痛みに顔を顰めながら状況を確認する。だが視界が狭く、俺に
何かした犯人を一瞬で見る事はできなかった。

「あなたは誰！？ 私をこんな所に連れて、一体どうしようとして
いたの！！？」

「いや犯人アンタかよー!!」
声で解った。犯人はナターシャさんだと。

予想外すぎる衝撃的事実に、俺は反射的に起き上がる。その時の力が凄まじかったのか、俺を抑えていたナターシャさんは吹っ飛ばされてしまった。

てかさつき、どういう体位だったんだろう。ひょっとしてすごくエロかったりして……。

(いや、そんなこと考えてるヒマないぞ今! ナターシャさん俺の事すっげー睨んでるもん。敵意丸出したもん)

とにかく、俺の事をわかってもらわないと話が進まねえな……。
何を言ったらいいものか……。

とりあえず、俺が福音だってことから信じてもらうしかないか。

「あー、ええっと……俺はアンタの持ってる『銀の福音』だ」
シルバリオ・ゴスベル

オイ俺! もうちょつと言ひ方他に無かったのか!? なんかいり
いろおかしかったぞ!!

ほら、ナターシャさんも全然信じてくれてな「まさか・・・そんな！」意外とイケそうだ！

「いやホントだつて。教科書とかにも書いてなかった？ 『ISには意識と似たようなものがある』って。その意識が俺」

「・・・たしかに、それはISに関わる人間なら誰でも知っているわ。でも、あなたがあの子だという証拠が無い」
あの子・・・あ、福音^{オレ}か。

「うーん・・・こんな恰好してうるついていられると思う？」

やっちまったああああ！！ コレ完全にドボンだよ！
！ 確かに理に適ってるけどコレは無いだろ！ いくら思いつかなかったってコレは酷過ぎるだろおおお！！

「そ、そうね・・・あなたの言う通りだわ」
ほら、ナターシャさんちよつと引いてるよ！ 多分兜みたいな物付けてるからわかんないと思うけど、俺もう涙目だよ！！

「んで たぶん、ここは俺の・・・福音の深層意識みたいな空間だ・・・と思う」

「ちよつと待って！ 思っつてどういう事！？」

「俺だつてさっきまで何も無い真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉

しくて混乱してるんだよ!！」

……ってまた恥ずかしい事をおおお!!

確かに寝ていたはずの私と同じ空間にいた甲冑の男はこう言った。

「たぶん、ここは俺の……福音の深層意識みたいな空間だ……と思う」

彼は確かに『思う』と言った。ここは彼……あの子（福音）の空間じゃないの？

「ちょっと待って！ 思うってどういう事!？」

私は彼に訊いた。ここでもし的外れな解答や返答に悩むようなら、すぐにでも殺さなければならぬ。

相手は男。ISは使えない。いざとなれば私の持っているこの鐘・
・銀の福音シルバリオ・ゴスベルでこの教会ごと吹き飛ばしてしまえば…………。

「俺だってさっきまで何もない真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉しくて混乱してるんだよ！！」

彼は確かに言った。私の事を『操縦者』と。

彼は自分の事を福音だと言っていた。そしてその操縦者が私だと言いつた。

この子……銀の福音は、その全ての情報が国家レベルでの機密とされている。

だから外部の人間が、その事を知っている筈はない。

あの子を開発した研究員なら誰でも知っている。でもそれ以外は……大統領ですら、私が操縦者だとは知らない。だから外部の人間が知り得る事なんて有り得ない。

さらに、開発チームは選り抜かれた少人数で構成された。だから顔も声も私はよく知っている。
でも、あんな声を持つ人はいなかった。

「（だとしたら．．．．彼は本当にあの子なの．．．．？）」

でも、ISの深層意識と対話するには長い年月をかけてお互いを理解し合わないといけない。

なのに、たった数時間搭乗しただけの私の目の前に現れるのが解らなかった。

「（いえ。ISにはまだ私たちには解らない事が多い。こういう現象があってもおかしくは無いハズ．．．それに）」

それに彼は．．．．『1人ぼっちだった』と言っていた。

何もない空間で、ただ一人、寂しい思いをして過ごしていたんだと思う。

それに、私に会えて嬉しかったとも言ってくれた。

「（なんだかんだ言っても．．．．まだ生まれたばかりの子供なのかもね）」

だったら私が、育ての親になってあげてもいいわよね。

第4話（後書き）

神「まさかの に入りましたね」

「ホントですねー。どうしてこうなったし」

神「あなたが話引き伸ばすために作ったんでしょ？」

「でもここまでとは……。暴走したとしか言いようが無い」

神「それで、これからどういう風に進めて行く気ですか？」

「あと1話か2話こんなカンジの話をして、原作3巻に侵入しようかと考えてます。」

それより、ホントキャラが安定しないよね、きみ」

神「これが本来の私です。でも、それでは10話まで持たないんじゃないですか？」

「一応6巻でも名前だけ出てきてるから……。あ、でも凍結処理されてるから動けないのか。本格的に継続が危ないことに気付いた」

神「また終る終わる詐欺か。いい加減にしたらどうだ」

「イイじゃん別に」

第5話（前書き）

「この前書き後書きの座談会が不評な件について」
神「知らん」

第5話

待機中で使える機能と、使えない機能がある事が徐々にではあるがわかってきた。

まず、外部との接触が全くと言っていいほどできない。音も聞こえなければ周囲を見る事もできない。

あと、この甲冑を強引に引き剥がそうとしたらものすごい痛かった。やっぱりコレ俺の一部だった。痛覚だけある。

それで、中身が多分だけ無い事が分かった。わかりやすく言うならばアルフォンスのような状態だ。

あと、急にここに来たのってなにか理由があるんじゃないかとヒマだったので考えた結果、俺の意識が完全に福音の意識？ を蝕んだという結論に達した。

これもし福音（の意識）が蘇ったりしちやったら、どうなっちゃうんだろうね。まさかその為の甲冑とか？ どうせなら剣も付けてくれよ。

（それにしてもヒマだな。なにか起こんねえかな・・・）

ボーッと真っ暗な、あるのかも分からない天井を見上げてた時だった。

一瞬にして視界が変わり、目の前には虎模様のISタイガー・ストライプが浮いている。

(・・・どういう状況?)

私は、変な夢を見た。

ベッドで寝たと思ったら、銀色の甲冑を着た男が騒いでいたので起こされ、起きた場所はどこだか知らない大きな教会で、その甲冑の

男の話によると自分は銀の福音で、その教会は自分の深層意識がどうのこうのと言いつらす、常識で考えたらいろいろとおかしな夢。

そして目が覚める直前に、あの甲冑の男は「あんたと会えて嬉しかった」と言っていた……。

という話を、同僚のイーリに相談したら……

「なにそれ気持ち悪っ!!」
即答だった。

「ちょ……ナタル、それきつとストーカーだぞ」

「なんで夢の中にストーカーが現れるのよ……」

「アレだよ、アレ。寝てるナタルの耳元で、そのストーカーがそつと呟くんだよ。で、ナタルは夢でその言葉を」

「それ以上は言わないで！ 蕁麻疹が出る……っ」

私は背筋に寒気がしたが、反射的に耳元を手で隠すようにしていた。

軍の宿舎で寝泊まりしているからと言って、油断はできない。その警備がやってくるかもしれないという、自分でもわかるくらい自意識過剰な疑心暗鬼に陥ってしまった。この目の前のイーリ（バカ）のせいで。

でも・・・あれは、ただの夢じゃなかった気もしないでもない。そんなあやふやでもやもやした気持ちで、私の心の奥底で燻っている。

「（なにか・・・大事な事を忘れているような・・・）」

あと・・・まるで、誰かが私のすぐ近くにずっといるような気が・・・。

「（ やっぱり、ストーカーかしら・・・？）」

本格的にそっちの線が濃くなってきたので、私はストーカー撃退用の罠を設置しようと考えた時だった。

「おい、ナタル。そいつの実戦テスト、そろそろ始めるんじゃないのか？」

「そっといえばそうね。もう行かなくちゃ」

今日は福音（この子）の実戦でのデータを收拾するためのテストがあるのを、あの夢のせいですっかり忘れていた。

そして数十分後。

私とこの子（福音）は、昨日一緒に闘ったバトルフィールドに來ている。

「ファイルスさん、準備を始めて下さい」

「了解しました」

研究員の指示に従い、私は銀の福音を身に纏う。

そして私と対峙しているのは……さっきまで私と話していた、イーリ。

彼女のIS、『フアング・クエイク』は安定性と稼働効率を重点的に昇華させたバランス型のIS。

「（つまりそれは、長期戦に持ち込まれたら不利ということ）」

さらに今回は、フアング・クエイクのデータも取るために全力で勝

負しろと上からお達しが来ている。できればこの子に勝たせてあげたいのと、イーリに負けたくないという私情も入ってくる。

でも・・・前回の起動テストみたいに動けなかったら、イーリ相手ではまず勝ち目が無い。

「（ちゃんと、動いてくれるよね・・・？）」

もし昨日の夢が、夢じゃなかったのだとしたら・・・

この子はきっと、動いてくれるはず・・・！

目の前に駆る虎模様のISを、俺は見た事が無かった。

（でも、あの虎模様になにか引つ掛かるんだよね）

詳しいデータが欲しいと俺が思ったとき、視界に詳細な情報がぽこぽこ浮かび上がってきた。

（なにになに・・・名称、『ファング・クエイク』。操縦者は『イーリス・コーリング』か）

あ、たしか6巻で出てきたナターシャさんの親友だったっけ？

ISの方も第3世代で、エネルギー効率重視型か。

（まだ実戦と言える経験をほとんど積んでいない俺に、米の代表さんの相手が務まるのか？ 答はもちろんノーだ）

ただどこっちにもナターシャさんがいる。正直俺のヤル気さえあれば、この人が何とかしてくれるよきつと！

……よし、まずは《銀の鐘》シルバー・ベルで一気にシールドエネルギーを削ってアドバンテージを稼ぐか。

『戦闘を開始して下さい』

ビィィィとアラームが鳴り響き、俺は銀の鐘を発動させようとする。

（あとはナターシャさんが起動させるだけ……）

俺がモーションをイメージした瞬間だった。

ガキィンッ！！

突然、車に撥ねられたような衝撃が俺の身体に伝わった。

第5話（後書き）

「こんなところでなんだけど、PVアクセス4万&ユニーク数8千越えおめでとう!」

神「普通前書きじゃね?」

「いいんだよべつに。あと、この話を読んで『逃げたな』と思っ
た方。この展開は初めから考えていた展開ですので、そこだけは間
違わないで下さい」

第6話（前書き）

これから座談会失くす方向でお願いします。時短の意味もあります。

あと、この話から主人公のキャラがガラッと変わっていくかも知ですが、それは徐々に精神がISと同化してきているからです。

第6話

（なんだ・・・！ 何が起こったッ！？）

突然の衝撃に、俺は《銀の鐘》^{シルバー・ベル}の発動をキャンセルさせてしまった。

あの攻撃は、エネルギーを溜める一瞬の時間と、それを全方位に放出するための僅かに上昇しながら回転する行動が必須となる。

後者をしないで発動させた場合、最悪撃った直後に暴発してその爆風に飲み込まれる恐れがある。

これは全て、先日の試験稼働で一度だけ使った銀の鐘を、ISの計算力とかを手に入れた俺が独自に観察、研究して立てた仮説だ。

そして、さっきの車が電車に撥ねられたような衝撃の正体も、すぐに理解する事ができた。

その正体とは 相手の打撃。それも、超高速の拳によるものだ。

俺の頭の中では、どうやってそこまでの加速を一瞬にして可能にさせたのかという思考に入っていた。そして、その答は一つしかない。

（間違いねエ．．．．．イグニッション・ブースト 瞬時加速だ．．．．．！）

あの機体．．．『フアング・クエイク』はスラスターが4基あつて、その4基を個別に瞬時加速させる『リボルバー・イグニッション・ブースト 個別連続瞬時加速』を使えたはずだ。

この距離でそのスラスターの2基を使ってそれを行つたとしたら、銀の鐘の攻撃直前の隙をつくまでもなく、人の視覚による反射神経を遥かに凌駕するスピードで接近できるだろう。そこに掛かるGは、ISが相殺してくれるからな。

多分、イーリスさんは戦闘開始直前までブースターにエネルギーを溜め続け、エネルギー充電を半ば無効にした形で強襲してきたのだろう。

（にしても……どこが『安定性と稼働効率を重視した機体』だよ！ どうからどう見ても超高機動型だろうがッ！）

いや……愚痴ってる余裕は全く無いぞ。こちらとまだまともに戦った事が1回も無いんだからな。

（クソッ……考えろッ！ どうやって戦えばあの機動力を封殺できる！？）

……
いや、違う。

機動力を抑えるとか、重要なのはそんな事じゃねエ。

（
本当に重要なのは、どうやって『勝つか』だろうがッ
！！）

「つく．．．まさか、出だしから切札を使ってくるとは思わなかったわ」

『ナタル相手だと、こっちも手加減とかできないんでないーりの声がオープン・チャンネルから私の耳に入る。』

でも、私の頭の中ではイーリとの会話とは別に、さっき突然銀の鐘の発動アイコンが出てきたのかをずっと考えていた。

「（やっぱり．．．私の意志だけじゃない、もう一つの何かも福音に影響を及ぼしている気がする．．．．．」

そう考えるのならば、昨日見た夢は本当だったことに．．．．うっん、まだよ。まだ結論を出すには早すぎるわ）」

まだ私には……銀の福音（この子）の事が、何一つわかっていないのだから……。

『ほらほら！　ボーっとしてるんだったらこっちから行かせてもらうぜエ！？』

イーリの声に、私は今彼女と戦っているのだと再認識させられた。

「（そう……今はデータ収集目的と言っても、ISによる戦闘中……。余計な事を考えてるヒマは、操縦者の私には一瞬たりとも在りはしない）」

イーリの駆るフアング・クエイクが、今度もまた一瞬で私を間合いに捉えた。
でも今回はただの瞬時加速だったみたいで、さっきほどの速さは無かった。

「（このタイミングなら間に合う！）」

私は福音の多方向推進装置の砲門を前方に向け、エネルギー弾を発射する事でフアング・クエイクを迎撃する。

でもそれはイーリも承知の上だったらしく、主武装のその拳でエネルギー弾を弾きながら殴ってくる。

「相変わらず・・・ムチャクチャね、あなた」

『日本には【無茶が通れが道理も引つ込む】って諺があるんだぜ、ナタル！』

イーリはいつエネルギーを溜めたのか、リボルバー・イグニッション・ブースト 他にも個別連続瞬時加速で追討ちを仕掛けてくる。

私は回避を試みるけど、思うように福音が動いてくれないから防戦一方だった。

それでも昨日の試験稼働よりは数段動きやすくなっていたのは、私にとってせめてもの救いだった。

シールドエネルギーの残量は、残り186・・・。

「（ここで反撃をしないと、勝ち目は完全に無くなってしまっ
「！）」

『んおっ！？』

私はイーリの拳を両腕で掴み、まるで羽を広げるクジャクのように、福音の翼を大きく開き、エネルギー弾を撃ち放った。

そしてさっきのお返しと言わんばかりの蹴りを、イーリの腹に浴びせて距離を取る。

『やっぱりやるなあ、ナタルは』

それでも、その直撃を受けたはずのファング・クエイクはダメージは受けているようではあったが悠然と宙に浮いていた。

「（もしかして出力が低下してるの・・・！？ でもそんな警告は出てないし・・・）」

やっぱり、この子は他のISとは、決定的な何かが違う。でも、そんな事より・・・

「（イーリに・・・負けたくないッ！）」

（あゝ、くそつたれが！ 人の事ボコス力殴りやがって！ 攻撃当たると痛エんだぞこっちは！）

さっきの連続攻撃だって、ナターシャさんがどうにかしてくれなかったら腕が折れてたかもしれないぞ！ 責任とれるのか！？

それと、防御力高すぎるだろ。なんでエネルギー弾をモロに受けてさらには蹴りも食らってそんな何事もなかったかのように佇んでるんだよ。心折れるだろ。

（つーかこれ、俺がナターシャさんの足を引っ張ってるからじゃないのか？）

俺が弱音を吐き始めたのと同時に

『今度もこっちから行かせてもらっぜツ!!?』
イーリスさんは身体をかがめ、瞬時加速の構えを取る。

マズいッ！ 今度またあの連撃を食らったら、残りの
ールド・エネルギーじゃ持ち堪えられないッ！！

畜生・・・これじゃあ、俺のせいで負けちまっじゃねえか！

(・・・ 負けたく、ねエ ツ！)

イーリスさんは個別連続瞬時加速で俺に向かって突進してくるのが
わかる。
リボルバー・イグニッション・ブースト

だが、これは俺がISのハイパーセンサーで直接確認できている映像だ。ナターシャさんはここからさらに、目から脳に、そして筋肉へと情報を伝達させなければならない。

つまり

人間の反応速度では、間に合^あはずが・・・無い

・・・

ハズだ^だった。

ガキイイ^イン!!!

金属音がバトルフィールド中に響き渡^{わた}った。

だがその硬質で無機質な音は、福音からではない。

『そんな……有り得ない……私の攻撃に、反応できるだなんて……!』

イリスさんの乗るIS、ファング・クエイクが、福音……つまり、俺に殴られた事による音だった。

(いや、驚いてるヒマは無い。すぐに追撃して少しでもダメージを与えないと……!)

ズダダダダ!!

羽ばたくようにエネルギー弾を浴びせ、俺は一度後ろに下がる。

(今までと感覚が違う……!? 次に何をすべきかが一瞬で解るような
)

その時、俺は気付いた。

気付いたのに理由なんてない。理論もない。だがそれでも、理解した。この決定的で絶対的な変化に。

（わかる．．．ナターシャさんが何をしたいかが、全て
！！）

第6話（後書き）

祝！ 7万PVアクセス&1万3千ユーニークアクセス突破！！

第7話（前書き）

第7話です。お待たせしました。

第7話

「（どういうこと！？ さっきまでと反応速度が全然違う・・・！！）
」

視界が一瞬でより鮮明なものへと変化したと思ったら、身体が軽くなつたような感覚がした。

いままであつた『ぎこちなさ』も完全に無くなっていた。むしろ、より動く。

「（行ける・・・！ このこの子となら、相手が誰でも負ける気がしない！！）
」

私は心の底から溢れてくる高揚感をギリギリのところで抑えながら、目の前にいるイーリを見据えた。

『おいおいナタル、手を抜いて油断させるなんて卑怯だぞ！』
プレイヤー・チャンネルからイーリの声が聞こえた。

「手加減していたつもりは無いわ。私はいつでも本気よ」
私はイーリにそれだけ言つて、スラスターを使った急加速で接近し、フアング・クエイクの胸部装甲の部分にスピードを乗せた渾身の蹴りを食らわせる。

そして吹っ飛ばされたイーリの背中に回り込んで、背中に胴回し蹴りを浴びせて宙に舞い上げる。PICを使って姿勢を維持し、翼にある銃口を全てイーリに向ける。

ズダダダダダダダ

ッ！！！！

放たれた羽のようなエネルギー弾の多くに手応えを感じた。

そして同時に、この子の性能の高さを思い知らされた。

「（こんな超次元的な戦闘を可能にすることができなんて、夢にも思わなかったわ）」

そしてこの運動性には……きっと、あの子が関係している。

煙幕の中に立つファング・クエイクを確認した時、俺は少しだけ戦慄した。

さっきのドラゴンボールのような連続技をモロに食らって、まだ立ってられる事に俺は若干の恐怖心を抱いたからだ。

（でも・・・なんだろう、この安心感は）

まるで母親に護られているような、それに似た安心感が俺を包み込んでくれていた。

でも、ここらで勝負を着けたいな……。そろそろ身体の痛みがキツくなってきた。

(《銀の鐘》^{シルバー・ベル}……アレで決めるしかない)

俺は《銀の鐘》の発動モーションを取り始めたが

ボウツ と爆煙を押しつけ、ファング・クエイクが俺に凄
まじい速さで突進んでくる。

だが……見える。その姿が、しっかりと！

^{リボルバー・イグニッション・ブースト}
俺は個別連続瞬時加速で突撃していたファング・クエイクの拳を、
まずあえて左肩の装甲に当てる。

だが衝撃を後方に流すように身体を回し、その時に受けたエネルギーを回転する力に変換する。

(コイツで……最期だ!!)

「こちらが福音の戦闘データです」

「ご苦労」

女性研究員に書類を受け取った初老近い男性の研究員は、パラパラと書類をめくってあるページをじっと見つめていた。

そのページにあったのは、戦闘時の福音の稼働率。

そのグラフを見ると、初めは10パーセントにも満たなかったのに、戦闘の終盤には95パーセントを超えていた。

少なくとも、彼はここまでの稼働率を見た事が無かった。それほどまでに、その数字は異常だったのだ。

「操縦者とISの同調^{シンクロ}・・・面白い」

男は1人、静かにそう呟いた。その言葉には、福音の【兵器】としての可能性を見出していたのが覗えた。

第8話（前書き）

どうも、おひさしぶりです。更新が滞ってしまっ
て申し訳ありません。

第8話

(寝たい……)

俺は今、それだけを考えてただただ無意味に時間を浪費している。

前にも同じことを言った気がするが、人間は眠らなければストレスが溜まり、イライラしてしまうのだ。そして俺はこの福音になっちまった時から、一睡もしてない。これがどういう意味かわかるか？

とにかく、俺は一度ぐっすり寝て、清々しい目覚めを味わいたいのだ。できればあの何物にも代えられない、布団の温かさも感じたい。

だが現状はどうだ？ 眠気はあれ以来一度もこないし、そもそも肉体のようなものはあっても横になったら床が冷たいし、何より寝にくい。ちなみに布団も無い。あるのは感触と虚無感だけだ。

何？ 何も無いがある？ バカ言うな。結局なにもねえじゃねえか、このハムスターが。

ああ、言い忘れていたが今の状況はあの教会のようなただっ広い空間だ。そこでたった1人、大の字になってる中世の騎士っぽい甲冑が俺。何も知らない人が来たら不審者扱いされる事間違いない。前にナターシャさんがキモがるより先に攻撃してきたのは、あの人

がISの国家代表操縦者だからと勝手な解釈をさせてもらおう。ラウラもきつと同じ事してるって。ああいう状況なら。

などと色々考えて時間を潰しつつ、ナターシャさんが寝てこっちに来るのをだらだらと待っているつもりだったのだが、その夜はぼっちで過ごした。

ISのコアネットワークをフル活用して、何とか時計機能を使えるようになったのは俺にとって非常に大きい。せめて時間くらいは知りたい。人間は時間を感じられる唯一の動物だと、どこかの哲学者が言ってた気がするし。

なんでナターシャさんが来なかったのかは・・・・・・・・今から考えるか。

あの変な夢は、今日は見る事がなかった。

もしかしたら、あっちに行くには何か特別な条件が必要なのかもしれない。

「（まだまだ機会チャンスはあるわけだし、焦らないでも大丈夫よね）」

色々と聞きたい事はあるけれど、それは次に会ったときになっちゃったわね。

私はベッドから出た後、一度シャワーを浴びてから食堂に出向いた。

島を丸1つ使っているこの軍事研究施設に滞在している軍人と、ここで働いている研究者たち。そして私やイーリのようなISの操縦者は、それぞれ専用の食堂で食べる。

ただ、私たちの方は他の2つとは明らかに違う。

どの国もISの機関にはやり過ぎなほどに資金を出しているから、
そう考えると当然なのかもしれないけど………

「（照明がシャンデリアになってて、6人分しか椅子がないこの部屋を、本当に食堂と言えるのかしら？）」

どちらかと言えば、ここはもう一流のレストランという表現の方が適切だと思う。

そして何より、ここを6人で使っているところを私は見たことがない。設計者は一体どんな要望を受けたのだろうか。

「ナタル〜！ こっち来いよ〜！」

………そんな事を考えているのは、どうやら私だけのようね………

「それで、あのストーカーは来たのか？」

「もうその話はいいわ」

私はパンをちぎりながらイーリに答えた。

「あ、そ。ところでナタルさあ、今日は超音速下の試験稼働だろ？
テストパイロットは面倒くさい仕事多いよな」

「別に私は、面倒とか思わないけど」

「ふーん。ま、私もモニター越しに見学させてもらうことにするぜ」

「どうぞお好きに」

いつもと同じように、私とイーリは朝ごはんを食べた。

でも、普段通りだったのはそこまでだった

。

第8話（後書き）

最近短いですが、今年中にあと1話は投稿したいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月28日21時40分発行